

第10回循環型社会施策推進部会

摘録

【日 時】令和7年11月14日（金）午後2時30分～午後4時

【場 所】京都市環境政策局会議室（京都市役所本庁舎1階環境総務課執務室内）

【出席委員】（会場参加）酒井会長、上原委員、梶原委員、佐藤委員、矢野委員、山川委員、山下委員、山根委員

（オンライン参加）崎田委員

【欠席委員】浅利委員、下田委員、高岡委員

【事務局】（循環型社会推進部）田中 循環型社会推進部長、藤岡 資源循環推進課長、

大沼 技術担当課長、橋本 事業ごみ担当課長

（適正処理施設部）元部 施設整備課長、平松 整備計画担当課長

議題 答申案「ごみ減量及び資源循環施策のあり方について」

（事務局）

資料1（諮問内容と検討スケジュール）、資料2（答申案「ごみ減量及び資源循環施策のあり方について」）に基づき説明

（佐藤委員）

強化すべき施策に至るまでの国の動き等の説明で、2R+リニューアブルが大事だと示している中で、最初に資源物回収拠点の強化、すなわちリサイクルが書かれていることに違和感がある。これは表現の問題ではなく、市の姿勢が表れているのではないか。

レジ袋使用量やペットボトル排出量の指標に関して、高い目標値に対して、具体的な手段を挙げない中で、覚悟を持つという表現は答申として無責任ではないか。プラスチックごみ分別実施率の目標60%も同様である。具体的な手段は書かかず、市民のモラル頼みで分別してくださいと言い続けても目標達成は難しいと考える。

また、事業者に対しては、まずは指針を作り発生抑制を進めていくとしているが、それを進めつつ、「そのうえで規制等も含めて検討されたい」のような内容を答申に記載できないか。

（事務局）

今回は中間見直しである。そのため、現行プランの基本的な考え方を踏襲したうえで、さらにプラスアルファとして強化していく施策を中心に答申案に記載する。2R+リニューアブルは優先して取り組む内容と既に位置付けており、決して力を入れないということではない。ただ、御指摘のとおり、答申案の書き方としては、意図が伝わるよう追記が必要と考える。

レジ袋使用量やペットボトル排出量削減の具体的な手段として、ペットボトルに対しては、マイボトル促進の取組等を引き続き進めていく。また、使い捨てプラスチック対策として、簡易包装やリユース容器を促進することによって、レジ袋やペットボトルの削減にも波及させていく。

プラスチック製品の分別回収によって、過去5年間横ばいであったプラスチックごみ分別実施率が、上がってきている。プラスチック製品だけでなくこれまで分別できていなかった容器包装の分別も引き続き、啓発していきたいと考えている。

（山川委員）

リユースについて、資源物回収の強化の項目には記載があるが、まだ不足していると感じる。リユース関連の数字をモニタリング指標でも良いので考えていただきたい。また、京都市が粗大

ごみのリユース事業で得た情報も確認いただけないか。少なくとも衣類と家具については、排出時と購入時のリユース選択率という指標を今から取得しておくことができないか。

(事務局)

強化すべき施策を踏まえて、モニタリング指標に検討が必要と考えている。現状はリユースに関する数字が把握できていないため、どういった指標を見ていくかも考えていきたい。

(山川委員)

CCUSに関して、S(ストレージ)は市内のどこでできるだろうかと疑問に思う。

(事務局)

京都市内には地中にストレージできる場所はないと考えているが、灰にCO₂を吸収させる技術に注目している。灰へ吸収を行うことが用語として、ストレージになるかは確認する。

(山川委員)

灰に吸収させても埋立地から戻ってくるようなことはないのか。十分に検討したうえで進めていただきたい。

(酒井会長)

現時点でストレージができると判断するべきではない。市として実施する可能性に加えて、日本全体の取組の中で京都市の参画ということもありえる。

(山根委員)

ごみ量の関係指標に影響を与える社会変化の増加要因として、観光需要の増加だけでなく、景気が良くなり、消費が上がって、ごみが増加するという可能性も考慮いただきたい。

(酒井会長)

消費動向の「注視していく必要がある」の前に「消費動向は今後増加もあり得るため」といった文言を追加しておくのが良い。

(山根委員)

市受入量とごみ焼却量の定義を教えていただきたい。市受入量の中にごみ焼却量が含まれているように見え、ごみ焼却量を達成すれば市受入量も自動的に達成できるように見える。

(事務局)

市受入量は入口の量で、そこから焼却に回る分がごみ焼却量になる。そのため、お見込みのとおり、ごみ焼却量は市受入量の内数である。市受入量は発生抑制のみの効果、ごみ焼却量は発生抑制に加え、分別リサイクルの効果も表れるものである。

直近の市受入量は36.5万トンであり、ここから社会変化・政策効果の影響を受けると2.4万トン削減されると見込んでいる。上方修正した目標の34万トンという数字は、36.5万トンから、2.5万トン減らした値である。

一方、ごみ焼却量については、直近の受入量が33万トンであった。こちらも社会変化・政策効果によるごみ量の影響を受けると2.9万トン削減されると見込んでいる。33万トンから3万トン削減し30万トンとした。

(山下委員)

レジ袋使用量やペットボトル排出量は目標とのギャップが大きい。一方でバイオマスプラスチック製容器包装排出割合がレジ袋として 37%あるということだが、これはレジ袋使用量のオフセットとして設けられたものなのか。バイオマスプラスチックの使用に御協力いただいた市民の方や事業者にどのように評価しているかを示す必要はないか。ペットボトルの指標に関しても、ボトル to ボトルを実施していると思うが、その評価も指標に勘案できないか。

また、発生抑制に関して、同業者の中では社内で出す飲み物を金属製容器に徹底しているところや、ペットボトルで出された水は飲まないという人もいる。こういった環境意識を持った人を増やす取組として、金属製容器のような再生可能な資源の容器が普及するような働きかけを、発生抑制に繋げる具体的な取組にできないか。具体策がないと目標達成は難しいと考える。

(事務局)

ペットボトルはリデュースを進めたうえで、使わざるを得なかったものに対しては、質の高いリサイクルを行うことが重要と考える。ペットボトルリサイクルの状況は、把握しているが、ボトル to ボトルの効果の見せ方に関しては考えていきたいと思う。また、意識を高める、普及につなげる取組は今後も引き続き考えていく。

(矢野委員)

社会変化及び施策効果によるごみ量への影響まとめにおいて、社会変化・施策の効果を積み上げて合計 2.4 万トン受入量削減、あるいは 2.9 万トン焼却量削減のことだが、社会変化・施策の起こる順番により、最終的な数字が変化すると考える。どの順番で試算したのか教えてほしい。

また、強化すべき施策の(3)プラスチック・衣類対策の強化に関して、衣類は発生抑制対策と書きながらリユースのみの記載である。ファストファッションを回避する適量購入のようなことも考えていく必要があると感じており、書き加えていただきたい。国の検討でも衣類対策に関しては、リユースが話題の中心となるが、リユースにどこまでニーズがあるのか疑問である。

指標の見直し(4)資源物回収の定量的なモニタリングは大事なデータだと考るるので進めていただきたい。可能であれば、原単位や利用者数等のデータも把握できると良い。仮に指標として設定できなくてもデータの収集は始めるべきである。また、消費者にとっては市の回収に出すのか民間に出すのかを、利便性で決めている人もいると思う。把握できる範囲で民間回収量の把握に努めていただきたい。

(事務局)

削減量の計算は、社会変化、発生抑制、リサイクルの順番で行っている。

衣類の適量購入を促す言及に関しては、強化すべき施策(3)衣類対策への機運醸成で市民への具体的行動の提示という形で示したいと考える。

民間回収量については把握している部分もあるため、示し方も考えていきたい。

(崎田委員)

強化すべき施策の最初にリデュースとリユースに関して強調して書くべきではないかと考える。

生ごみに関して、強化すべき施策には食品リサイクルの話が中心となっているので、食品ロス削減についても記載いただきたい。最近の事業系食品ロス対策は、先行している大規模飲食店に加えて、小規模飲食店においても消費者の協力を得て減らそうという動きが起こっている。その動きを反映した記載があつてもいいのではないかと考える。

祇園祭等のイベントでリユース食器を活用して、ごみを大幅に減らしていることは京都市のす

ばらしい特徴の1つだと考える。このような取組も成果として発信すべきではないか。

(事務局)

リデュース・リユースの示し方は、答申案として不足していたと考えるので、分かるように修正を考えていく。

既存のプランにイベントごみに関する記載があるため、中間見直しでは追記せず、引き続き実施していく予定である。

(酒井会長)

指標一覧にピークである2000年の量も毎回並べて記載するようお願いする。

(事務局)

答申案の中では表1「京・資源めぐるプラン」の数値指標一覧表に記載している。今後もピークの量を示したうえでの現状の数字を示していく。

(酒井会長)

強化すべき施策として、リデュース、リユースを強く進めていくべきではないか、という発言があった。その実施判断のために、上原委員にレジ袋使用量、ペットボトル排出量の目標値について、次の一手があるかという点も含めて発言をいただきたい。上原委員は、前プラン目標値の定量的な解析を行い、学術論文も執筆されている。

(上原委員)

レジ袋使用量、ペットボトル排出量に関しては、京都市でできること、事業者と連携してできること、国と連携してできることを整理すると良い。

レジ袋に関して、8割以上がごみを入れる袋として使われているが、食べ残しを入れて捨てているものがあると考える。国や事業者と積極的に連携して、生分解性プラスチックへの転換や、レジ袋でない容器へ入れるような施策も考えられないか。

ペットボトルに関して、大学での検証において給水機の設置が効果的であった。検証ではペットボトルの使用量は減少しており、CO₂が大幅に削減できている計算結果がある。京都市においては、既存給水機の使用量を分析して、最適配置を行うこと推奨する。

給水機について、常温と冷水に加えてどのような機能があるとより利用してもらえるか、大学生を対象にアンケートを行った結果、給水機を利用しない人は、お茶を飲む人が多いことがわかった。そのため、温水機能は有効であると考える。また、マイボトルを洗うことができる場所が必要ではないかと考えている。ボトル洗浄機は高額でないため、導入実験を行うのが良い。

(酒井会長)

次の一手も検討可能であるという旨の発言をいただいた。本日は、容器を金属製にしていくことや衣類の適量購入、事業系食品ロスのきめ細やかな対策、姿勢としてリデュース対策は大事にすべきという意見があった。それらを踏まえ、強化すべき施策のはじめに、「リデュース方策の推進・徹底」という項目で、先ほど出た追加方策とこれまでの対策は維持することの宣言を2~3行で記載してはどうか。現行プランを策定した際に、リデュース対策は徹底して書いている。その時から比べて次の一手があるのであれば、強く打ち出せば良いと思う。また、リユースのモニタリングは、定量的な把握は難しいと思うが、資源物回収拠点での回収量やリチウムイオン電池関連の指標も含めて、来年春にプラン案を出す際には、具体的な提示ができると良い。

(崎田委員)

ごみ量への影響を見込む社会変化要因に記載されているペーパーレス化に関して指摘させていただく。新聞やコピー紙は減少傾向にあるが、弁当箱やキッチンカーの皿のような容器をプラスチック製から紙製にするところが増えてきている。大阪関西万博においても、予定よりも紙製容器を使う業者が多く、急いで資源化ルートを作ったと聞いている。今後、紙製容器をより多く使うようになった場合に、ごみ量や資源化量に影響を及ぼすと考えるため、注視いただきたい。

(酒井会長)

中間見直しの施策として受けるのは難しいが、注視していくという対応にさせていただく。

(佐藤委員)

ペットボトル排出量に関して、マイボトルの使用を進めていくことは大事なことである。一方でペットボトルを金属製容器に切り替えていくことも検討いただきたい。このように様々な手段を並行して進めていくことが大事と考える。発生抑制対策として記載できないか。

(酒井会長)

マイボトルに関しては素材に関わらず容器包装を減らす考えであるため、素材代替と同格ではないと考えるが、先ほど述べた冒頭2~3行に素材代替も盛り込んではどうか。

(山川委員)

「簡易包装」という表現は古く、今までどおりと感じるので、包装のリデュース促進、包装削減促進、発泡容器の発生抑制などに変えた方が、これからやろうと思っていることにフィットするのではないか。

(山根委員)

給水スポットが認知されていない。スマートフォンのアプリ等で京都市の給水マップを誘導ができるれば良いと思う。

閉会

(事務局(田中循環型社会推進部長))

昨年11月29日に諮問させていただいた「ごみ減量及び資源循環施策のあり方」について答申案という形で議論させていただいた。これまで5回の検討を部会で実施し、皆様の御尽力にあらためて感謝を申し上げる。2Rが最優先という中で、プランの中間見直しのため、その表現が少なかったことに関して、反省点があると考える。いただいた意見を踏まえてしっかりと答申案の中に明記させていただく。

そのほかにも、すぐに対応できること、御意見を契機に進めていくこと等があるが、非常に多様で貴重な意見を頂戴した。本日の意見を踏まえ、月末の審議会本会で再度議論させていただき、答申にまとめたいと考えている。引き続きのお力添えを賜ることをお願い申し上げ、御挨拶とさせていただく。

(事務局)

本日も様々な御意見を頂戴し、感謝申し上げる。

以上をもって、本日の第10回循環型社会施策推進部会を閉会させていただく。

(閉会)